

おわり・なごやは・だれでもつ？
大相撲名古屋場所観戦記

<1> 十両の土俵 (十両星取表 <http://www.sumo.or.jp/result/data/hoshitori?rank=2>)

今場所は十両の土俵も丹念にテレビ観戦して見た。毎場所新しい顔ぶれが登場するので興味が高まったというのが正直なところである。石浦・宇良・里山などの小兵力士が登場したことで、このところ巨大化・重量化の傾向にあった相撲界に新しい風が入ったように感じられる。

里山はもう新しい風でもないが、小兵ながら活躍する力士の魁と言える存在である。176cm 115Kg、相手のまわしに食いつくためにやや変則的な立ち合いをするが、食いつきに成功すると低いところから矢継ぎ早に技を仕掛けて相手を揺さぶる。極端に低い姿勢なので時には相手の叩きの餌食になることも多い。今場所は肩を怪我して5勝しか上げられなかった。

石浦はやや正攻法に近い相撲をとるが、低い姿勢と動きの速さが光っていた。前半は快調に飛ばしたが後半失速して7勝8敗。173cm 110Kgの体は里山よりさらに小さい。

宇良は173cm 127Kg、前述の二力士に比べるとやや腹が膨らんではいるが、ほぼ似たような体つき。早い動きで機と見ると様々な技を繰り出して、土俵に落ちる寸前まで攻めの手を休めず「居ざり」などアクロバットのような決まり手を見せてくれる。この変則的な相撲を支える体は、かなり柔らかいに違いない。優勝争いに加わり、11勝4敗の好成績を上げたので、まだ大銀杏を結えないが来場所は新入幕を狙える地位に躍進するだろう。

<2> 新しい力となるか (幕内星取表 <http://www.sumo.or.jp/result/data/hoshitori?rank=1>)

十両に新しい風が入ってきたが、その中から抜け出して新入幕を果たすが跳ね返されて再び十両へ陥落。一度か二度これを繰り返している内に多くを学んで力をつけた者が幕内に定着することができる。

錦木・北碓磨・輝・大栄翔・大翔丸・御嶽海・正代などがそんな日々を過ごしている。

錦木は栃ノ花以来の岩手県出身力士。きちんとした身のこなし方とけれん味のない正直な相撲で、しかも最後まで勝負を捨てない粘りは評価できる。入幕二場所目の今場所を9勝6敗で治めて第一関門突破と言うところか。

新入幕の北碓磨は29才(7月末には30才になる)、体はさほど大きくないように見えるが182cm 126Kg。

どんな大きな相手にでも正面からぶつかっていく、ここまでやらなくてもいいのと思わせるような正直な相撲。思わぬ収穫があるかと思えば、玉砕もある。15枚目で6勝9敗は跳ね返されて陥落と予想される。御嶽海と正代は幕内の水に慣れて、幕内上位に通じることが試される場所だった。

大銀杏が結えないままで東前頭筆頭に躍進した御嶽海は、5勝10敗と見事に跳ね返された。しかし、照ノ富士を破った一番を含む何番かの相撲で見せた力強いハズ押しとおっつけは今後大きな武器になるような気がする。一直線の相撲を磨いて欲しいと切に思う。

正代はやや腰高なのが気になるが、柔らかな体でどんどん前進圧力をかけながら臨機応変何でもやりこなす相撲で、腰の高さを除けば往年の大関大麒麟を感じさせる。入幕から四場所、上位の壁に跳ね返されると思いきや、のびのびと相撲をとって9勝6敗でこれをクリヤした。毎場所少しずつ学習しているのがよくわかる力士である。

十両・幕内ともに新しい風が入ってきて、少しずつ変化してきているので、これからも目が離せない。

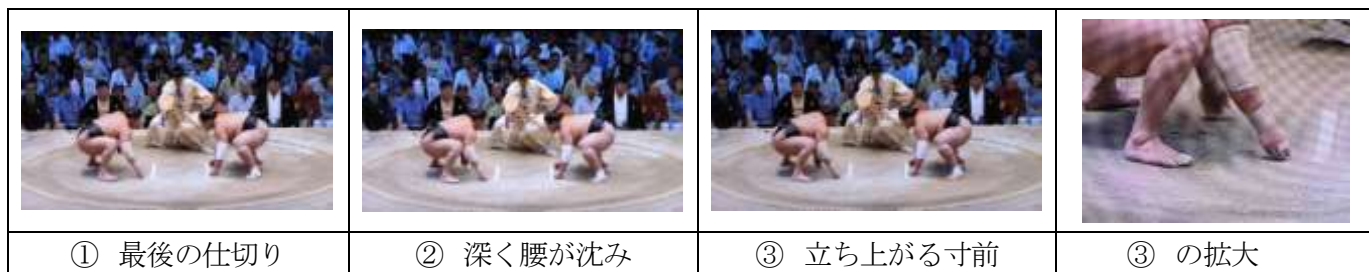
<3> 立ち合い正常化の鍵

「立ち合いの正常化」が叫ばれてもう何年にもなるが、一年ほど前から呼吸の合っていない立ち合いに対して審判長が「待った」をかける動きが目立ってきた。今場所はさらに進み、立ちあがってしまった瞬間に行司や審判長が「待った」をかけて、「立ち合い不成立」としてやり直しを命じる場面が数多く見られた。

「ようやく相撲協会がこの問題に手をつけ始めたな」という印象ではあるが・・・。
一旦立ち上がってぶつかりあってしまった両力士の間に行司が割って入って「待った」をかけるのは、観客の立場からすると違和感を禁じ得ない。しかも、何が起きたのかの説明がないまま仕切り直しに入るので、観客不在としか言いようがない。明らかに一方の力士が早過ぎたり、手を付いていないのが明確な場合はわかりやすいが、それでも後方の観客席からでは何もわからない。

「只今の立ち合いは、東方 XX 山の手つき不充分の為立ち合い不成立となりました」と館内アナウンスでもすれば、観客の納得も得られるのだろうし、常習者の名前が記憶に残りやすくなる。

白鵬・照ノ富士戦で見られたケースでは、国技館のお客さんばかりかテレビ観戦のお客さんにも納得了解が不十分だったような気がする。また、テレビ画面が映し出した判定に対する白鵬の不満気な表情が気になったので、後刻ビデオのコマ送りで確認してみたら手を付いているようにも見えた。



「モニター室で映像確認をして立ち合い成立・不成立を審判長や行司に知らせる」ことも必要かもしれない。このような新たな手法の導入もさることながら、事の解決を一番難しくしているのが「明確な基準」の欠如であろう。

昔は、両力士の気が合って立ち合いの機が熟したと見ると、行司が判断して両力士が意を決した時代もあったらしいが、現代の「先を争う競技」と化した時代にはこの考え方はそぐわない。

現在の定めでは、「両手をつく」「片手をついた上で、機を見てもう一つの手を（一瞬でも良いから）つく」「両方の手を同時に（一瞬でも良いから）つく」などの動作が認められているので、これが混乱のもとになっている。

「蹲踞の姿勢で睨みあう」あとは、「相手力士の一挙手一投足を見落さず」見合いながら「深く腰を割り」「両の拳を土俵に置き」、「相手の目を見続け」ながら行司の動きにも注目し「行司の発声で立ち上がる」のような細かな規定を設けた上で研修会を重ねていかなければいけない。

現実にこのような立ち合いをしている力士は少なくなく、これが基本だろうし徹底不可能なことではないと思う。

<4> 日馬富士久しぶりの優勝

日馬富士は前半戦に一敗を喫したことで、マスコミその他の優勝争い報道からは離れていた。結果的にはこれが「静かに相撲をとる」ことにつながったのではないかと見た。白鵬が崩れるのを見るや否や尻上りに調子を上げて行き、「横綱を狙う」というタイトルが付いた大関を弾き返すような勢いで千秋楽を終えた。故障してしまった白鵬との戦いは日馬富士の圧倒的な勝利で、横綱同士の取組とも思えないようなつまらない内容になってしまった。

終って見れば、隠岐の海に敗れた一敗は勿体なかったなと思うのは本人も同じかもしれない。

白鵬は 10 勝 5 敗に終り、38 回も優勝することの難しさ、1000 個も白星を積み上げることの難しさを痛感する名古屋場所だった。

<5> 稀勢の里の苦悩

前半戦で栃煌山に敗れて一步後退のスタートとなったが、相手の動きを落ちついてさばきながら勝ち星を得るパターンは先場所からの継続のように感じた。10 日目、松鳳山の奇襲攻撃にやられたところで完全に歯車が噛合わなくなり、日を追う毎に腰が高くなり落ちつきのない相撲になってしまった。

松鳳山戦で、頭を下げて一直線にぶつかって行った結果土俵上に転がされたことで、立ち合いの心構えが壊

れてしまったように見えた。

それでも、これほどに騒がれながら 12 勝 3 敗の成績を残せるのは立派なものだ。よしんば大関の地位で終わったにしても「名大関」の称号がふさわしい力士である。

腰高の相撲のままに勝ち星を確保して行くためには、迷わず腰を移動させて前進圧力をかけ続ける相撲を貫かなければならない。立ち合いで迷ったのでは勝ちを得られない。

少しでも低いところからの攻めを体得するためには、立ち合いの踏み込みの中で前みつを狙う相撲への切り替えが必要ではないかと思う。右上手を欲しがるとあまり脇が甘くなる欠点も是正できるだろうし、深い上手を取り過ぎるために次の動きが取りにくくなる欠点をも直して、浅い位置の上手からの攻めをマスターすれば鬼に金棒だと見ているのだが、30 才の大関が相撲の型を変えるのは至難の業だろう。

いずれにせよ、横綱に一番近い所にいることは確かなので、もう少し奮闘を続けて貰いたい。「この苦しみを一年も続けているのはちょっと可愛そう」と同情的な発言をする人もいるようだが、横綱になってしまえば毎場所これ以上の緊迫感の中で何年も相撲を取り続けなければならない。

<6> NHKにひとこと

NHK の相撲解説のレギュラーメンバーは北の富士と舞の海となっているが、時々この席にほかのメンバーが座ることがある。

芸能人や他の分野のスポーツマンが登場するともう聞くに耐えない実況中継になる。解説の位置付けだったりゲストの位置付けであったり様々なようだが、相撲中継の番組からは遠く離れた番組と化してしまうのは問題である。今日の前に繰り広げられる一戦一戦をテレビやラジオを介して視聴者に送り届けるという使命を忘れて、低俗なモーニングショー的な雰囲気になってしまうのは何とも迷惑な話だ。時にはゲストの方の大相撲観賞番組のような状態になることさえあり、見るのもいやになる。

実況中継のアナウンサーは勿論のことだが、解説者にも「活舌」「聞きとりやすい声と解りやすい語り口」は必要な最低条件でもある。玉ノ井（元栃東）や伊勢ヶ浜（元旭富士）は技術的な解説は面白いが、ボソボソ語りは放送向けではない。八角（元北勝海）の声は聞きとりやすいし話も解りやすいが、理事長になってしまったので登場は不可能になった。声の質が良く技術解説がわかりやすく面白い朝日山（元琴錦）は部屋持ちの親方になってしまい登場しなくなった。谷川（元北勝力）の解説は、本人の相撲スタイル通り正統派ではないので、面白い時は面白いが面白くない説明も少なくない。立田川（元豊真将）、西岩（元若の里）は断髪式を済ませたばかりの新人親方でまだ喋り慣れてはいなかったが、ゲストで登場した時の印象では、実直な人柄と正直な相撲スタイル通りの味のある解説だった。技術的な知識は豊富だし、苦勞人ゆえ（と言っては失礼かもしれないが）内面に触れる所まで語ってくれるので「人に聞かせる喋り方」を勉強したら素晴らしい解説者になれるのではないかと期待している。

勝ち越した力士や上位力士を破った力士をインタビュールームに読んでインタビューする。近頃の力士は比較的よく喋ってくれるが、昔は「多くを語らず」の人が多かったので大変だったらしい。

とは言っても、「一日一番、しっかりやるだけです」「頑張ります」などの定食メニューのような受け答えだけしかしない力士が多くて聞いていても面白くないことが多い。これは外国出身力士が増えことにより、インタビュールームに呼ばれたがまだ日本語が十分に喋れない力士が多く、覚えてたの言葉であたりさわりのない応答をする内に、それを皆が真似るようになった。ところが何と日本語を喋れる日本出身力士にまでそれが広がってしまったと言う感じがする。在日韓国人や中国人が喋る片言の日本語のイントネーションが日本人の間にまで浸透してしまった日本語の乱れと良く似ているから面白い。

最近インタビュールームに頻繁に登場する力士の中では安美錦と嘉風が面白い。アナウンサーが軽い質問で切り口を開けば、後は分かりやすい語り口でいくらでも喋ってくれる。（こう言う人を実況中継の解説に選ぶと良いのかもしれない）それにしても、アナウンサーのインタビュー技術をもう少し向上させた方がよいのではないかと思うことが多い。

優勝争いの先頭に立つ両横綱の後に星ひとつの差で付く平幕の力士に、あたかも優勝決定戦に出る力士へのインタビューのような仕方で迫る。インタビューされた力士は、星一つの差を覆して自分が優勝することなど考えてもいない筈だし、「私には無縁の話だ・・・」と受け答えしているにも関わらず、アナウンサーの質問はそこから離れようとしなない。数値データの上ではこの人にも優勝の可能性はあるかもしれないが、少々考えすぎのインタビューと感ずることが多い。

その昔マラソンレースの実況中継の折、号砲一発走り始めて二分ほど経過した最初の 1Km 通過時に、アナウンサーが「このペースで行くと世界新達成かもしれない」と騒ぎ、ゲスト解説者の元マラソン選手にたしなめられたことがあった。

データは大事だし、過去の記録や実績は大事だが、それらの数字だけに拘って考え過ぎると、うるさい解説になってしまうことが多い。

昔ながらの、目の前で繰り広げられている競技を「いかに忠実に報道し」、テレビやラジオをで聴いている人達に「いかに分かりやすく伝えるか」が大事で、「いかに面白おかしく伝えるか」はあまり必要なことではないと思う。だから「前畑がんばれ、前畑がんばれ」意外に表現の方法が見つからなかったアナウンサーの話が長く語られるのではないかと思う。

以上